

妖夢討  
夜鳥  
事



此しきかなや月は花雪

いをわれば白鳥の浮木

ただ暑中に埋木の

せらば埋もれも果てずして

はいほに蹴るらん

浮き沈む波のうつほ舟

こがれて堪えぬいにしへを

刃び果つべき隙ぞなき

■一■

生温い風が首筋を撫でるように吹き抜け、風雨に晒されて文字の薄れた卒塔婆がからからと鳴る。

薄暗い墓地は鬱蒼とした木々に囲まれ昼なお暗い。そこそこに灯る青白い燈火の中に、羽虫が自ら飛び込んで短い命を終え、じじと焦げ音を立てて小さな煙を上げた。

角型の墓石が規則正しく立ち並ぶ無縁墓地は、ただひたすらに広大だった。果ては遙として知れず、ふと気を抜けば自分がどこを歩いていたのかも見失いかねない。傾いた墓石の陰から這い出した鬼火がふらふらと飛び交い、地に落ちた墓影を揺らめかせる。生者と死者の住まう境、此岸と彼岸を隔てる川面、顕界と冥界が触れ合う世の狭間は、こうして人里に近い場所にも存在しているのだ。

「きゃあー……っ?!」

幽玄の趣深い死廟の光景とは裏腹に、響く悲鳴はどこか間の抜けた色合いを帯びていた。……喻えるならば、絹ではなくて麻か木綿を裂くような。

空に響くのは、<sup>スベルフレイ</sup>撃破の快音と閃光。天を塞ぐように枝を広げる木々の合間で、いくつかの影が交錯する。鬼火の間を飛び回る羽虫が驚いたように身を震わせ、姿を消す。

小さな足音と共に、墓石の合間に少女が降り立った。額で揃え

られた美しい銀髪に、活動的な膝上丈のスカート。その手には小柄な彼女の体躯に不釣り合いな、長尺の太刀が握られている。白刃が鬼火の輝きを受けて青白くきらめいた。

一拍遅れて、ふわりと半透明の白い霊がその傍に寄り添う。半人半霊の庭師、魂魄妖夢は、四尺七寸の太太刀楼観剣の露をひゅんと振るつて落とし、瞑目と共に腰の鞘へとおさめる。

「ああ……」

そしてわずかに遅れて、先程の悲鳴の残滓を引きずりながら墜落してくるもう一つの影があった。

梢を激しく揺らし、煙を引いて落下してくるのは、青い服の少女。地面に激突する直前に墓石の角にぶつかって『ぐえっ』と鈍い呻きを上げ、倒れる墓石の地響きが苦むした燈籠を揺らす。

鬼火が一斉に揺らめき、わずかに火勢を強めた。

ほうと息を吐いた妖夢が残心を取ってそちらを見れば、一際ぼろぼろになった茄子色の傘を握り締め、被弾で黒焦げとなったお化け傘が目をしていた。

目を回したまま動かない彼女——多々良小傘と、己の掌中の刀を見比べて、しかし妖夢は思案顔。眉を寄せて一人、納得のいかなぬ表情で首を傾げる。

「うーん……」

……本日の対戦成績、六戦全勝。命名決闘法<sup>スルカトドレン</sup>に基づく規定は一死三符<sup>イチシホウ</sup>。いずれも小傘の繰り出したスベル全てを真つ向叩き斬つての圧勝であったが、それでも妖夢の表情は晴れなかった。

「……なんだかあんまり克服できた感じがしないなあ」

「いきなり斬りかかってきてひどい言い草だなあつ！」

小傘はがばと身を起こして叫んだ。頭には真新しいたんこぶを作り、髪をちりちりと焦がし、涙目に煤だらけの顔と、もはやお化けの貫録は微塵もない愉快な姿だ。

日々、通りかかる者に見境なく襲いかかつては『うらめしやー！おどろけー！』と繰り返している彼女とて、辻斬り同然に切りかかってこられた上でこの言われようは、流石に理不尽というものだろう。

「もおー！ なによう、毎日毎日斬りかかってきてつ！ 何か私に恨みでもあるのっ!？」

「うーん……」

お化け傘に怨恨の動機を疑われるというのは割合と希有な経験かもしれないが——手足をばたつかせ、涙ぐみながら抗議の声を上げる小傘に、しかし妖夢はやはり難しい顔。しばし考え込んでから、口を開く。

「もうちょつと真面目におどかせない？」

「存在全否定のダメ出しされたっ!？」

六戦全敗の挙句、とどめとばかりにお化け傘のブライドもぼつきりへし折られ、ついに小傘はいじめてその場に座り込んでしまった。ぐずぐずとすすり泣きながらいじめて地面に『の』の字を書き始める。

「ううう……ぐすつ。いいもん……どうせ私なんか知らない子なんだ……。最近はどこに顔出してても空気読めみたいなこと言われるし……」

「あ、そっちの方がまだ少しは怖いかも」

「うわあ——んっ!」

無慈悲な追い打ちにとうとう大声まで上げて泣き出す小傘。付喪神の感情の高ぶりは涙と成り、弾幕へと変じる。

「うわつ、つと」

押し寄せる大粒の涙滴弾に、妖夢は反射的に腰の剣を抜き放っていた。迷いを断つ短刀の刃が宙空に旋回、白刃が残像を引き、盾となつて弾幕を弾き返す。

——**反射下界斬**。鏡の如く輝く刃に反射された弾幕が、そのまま小傘に跳ね返った。

「もおやだー!」

自分の弾幕に被弾して、再度悲鳴を上げつつ吹き飛ぶ小傘の悲鳴が、被弾音の連奏にかき消えてゆく。

「あ、えーと……ごめん」

流石に悪い事をしたかなと思う妖夢だが、焦げて突っ伏し動かなくなった小傘にはもはや聞こえていないようだった。

なんとなく後ろめたい部分は覚えつつも、妖夢は手の中の二振りに視線を戻す。

お化けや怪談は、妖夢の苦手なものの一つだ。

昔からその事ではよく主にはからかわれていたものだ。永夜異変の余録となった竹林の肝試しでは、すっかり怯えてしまつて酷い醜態をさらしたのはいまだに恥じ入るばかりである。

見習いとはいえ仮にも白玉楼の剣術指南を預かる身。果たしていつまでもそんな甘えが許されるのかと思うに至つて、妖夢はこ

の弱点の克服を決意したのであった。

先頃よりこうして墓場へ出向いて、毎日特訓に明け暮れる日々なのだが——どうにもこの愉快な忘れ傘相手では修行になつていない気がしてならない。

(でも、他にいい相手も知らないし)

地底の鬼、星熊勇儀との一戦から戻った妖夢は、幽々子の申しつけ通りに渋谷鶴退治へと向かい、見事彼女を討ち果たした。

……そりやもう、呆気ない程にあつさり。

先頃新しく出来たばかりの寺に棲みつく件の怪物、鶴とやらはやたらに可愛らしい格好をしていて、『お前はここで終わりがな！』などと自信たつぷりに不意を打ってきたが、少しばかり奇をてらった程度の弾幕、地底で鬼の四天王との戦いに明け暮れ、勝負勘を研ぎ澄ませていた妖夢にとつては、正直欠伸の出るような子供騙しのものでしかなかったのだ。

最後の一枚らしいスベルもさしたる不自由なく避けた妖夢が一気に間合いを詰めて楼観剣を振るうと、鶴はあつさり撃墜されて地面に転がり気を失う始末。仕舞いには彼女の後見人らしい佐渡の化け狸が割って入り、あんまり苛めんでやってくれんかのうと釘を刺されるという、実に締まらない結末であつた。

あんまりにも残念なオチであつたため、詳細までは幽々子にも報告していない。思うような鶴は見つからなかったと言う妖夢に、主人はいつものように『駄目ねえ妖夢は』と微笑むばかりだつた。

(……弱点、かあ)

ここ暫く、立て続けに妖怪退治を命じる幽々子の真意は、恐ら

く自分の苦手を克服しろという事なのだろうと妖夢は理解している。

確かに、地底での鬼との対峙に妖夢が辛んだことは多かった。正々堂々、真つ向勝負、嘘を嫌うゆえの融通の利かなさ。精強さの極致、力の象徴のような鬼ですら、その強さに大きな長短を抱えていたのだ。勇儀との一戦は、妖夢にとつて自分の強さ、己の抱える欠点を見つめ返す良い契機となつた。だからこそ今回、お化け克服なんてことを思い立ったとも言える。

これまでは単に恐いの一言で片付けてしまっていたけれど、改めて考えてみれば、妖夢は幽霊が怖いのではない。そもそも亡霊と幽霊だらけの冥界は白玉楼で、彼等の存在は日常である。そこで庭師を務める妖夢がそんなものを怖がる理由が無いのだ。それを言い出したら、半分は幽霊である自分の半分にも怖がらなければいけない理屈になる。

(いやまあ、自分の一部だつて暗い所でいきなり目の前に来たりすれば驚くけどね)

ちらと傍らの半霊を見、一人納得する。そういうのはたぶん、普通の人間でも同じだろうと考える妖夢であつた。

そして、怪物が怖いのかと言つとまた少し違うような気もする。霊廟の異変で出会つた動く死体であるキョンシーも、おどろおどろしく現れるお化け傘も、いまいち自分の恐怖を呼び起こすようには思えなかった。

では一体、この恐怖の源はなんなのだろう。妖夢の疑念は目下そこに集中していた。

どちらかと言えば、妖夢が苦手なのは怪談話のたぐいだ。因縁めいて語られる凄惨な事件、そこに残る怨嗟、怨念。理不尽に無差別に襲いかかってくる正体不明の怪物。つい、色々と思いつく。そうになり、妖夢は慌ててぶんど首を振った。

「うーん……………」

考えてみれば、例の肝試しの時も、面白がった他の面子にいろいろと怪談を吹き込まれてしまったのがあの失態の原因だったように思う。

では一体、それらの怪談話と目の前のお化け傘、一体なにが違うのかと言われると良く分からないのだが……ともあれ、自分が捨てたわけでもない傘にうらめしやーなどと言われても、実際何が恨めしいものやらで、むしろどう反応していいものか困るのは確かである。

それでも他に良い修業相手がいるとも思えず、とりあえず、せっかくロケーションまで気にして墓場に向いている訳だが——どうにも小傘相手の特訓には手応えが感じられなかった。

「うん。いつの間にか克服できてたのかな」

結局、結論は出ないまま妖夢は前向きに頷いた。どう見ても明らかに人選ミスなのだが、そのあたりのことはあまり気にしない妖夢である。基本的には単純な娘であった。

「おんと遠く寺の鐘が鳴る。後を追うように山彦の大声が時報を告げる。命運寺の妖怪達によって鐘は律儀に毎日同じ時刻に鳴らされ、最近では随分重宝されていた。

「いけない、もうこんな時間だ」

物思いに耽っていた妖夢は慌てて立ち上がった。様観剣を背に、白楼剣を腰の定位置に戻し、びよんと倒れた墓石から飛び降りる。相変わらず泣きべそをかいている小傘に軽く手を上げ、走り出す。

「じゃ、またね」

「もお二度と来るなあー!」

涙交じりの小傘の声を背に、妖夢は墓場を後にした。

## ■二■

人里の商家が立ち並ぶ通りは、今日も喧騒に満ちていた。

食料品、呉服屋、小物問屋、茶店に質屋に両替商。里の経済の中心たる半町ばかりの大通りには様々な店が軒を並べ、月に三度は広場に市も立つほど。朝から晩まで客足が途絶えることは無い。空を飛ぶ妖怪や魔法使い達の着陸路も兼ねる十間通りの人混みの中、両手に背中に、里の商店を巡って仕入れた雑貨や食糧を山と抱え、妖夢は買い物に走り回っていた。

「……よつと。どうもありがとうございます」

「おうよ、毎度ありい」

雑貨店の店主に頭を下げ、買い込んだ荷物を背負う。

妖夢が特訓で通いつめている命運寺裏の墓地は人里に近いため、最近はいでにここで用事を済ませることが多くなっていた。冥界の近くにもこうした品物を取り扱う商店が無い訳ではないが、やはり新鮮な食材や流行の品、安くて質の良いものはここでなければ揃わない。

中有の道の店は主として地獄で罪を償う魂が功德を積むためのもので、中には不心得者が質の悪い品を売り捌いたり、逆に職人が精魂込めた品を露店でただ同然で投げ売りしたりと、どうにも品揃えが読みにくい店ばかりなのである。

ぎつしりと中身を詰め込み、はち切れんばかりに膨らむ買い物

袋はひとつ十キロをゆうに超えるものばかりだ。それを三袋ずつ手に提げてものともせず、さらには自分の数倍の大きさの荷物を背負いながら、妖夢は涼しい顔でたつたかと通りを走ってゆく。少し離れて眺めてみると、荷物の山が宙を飛んでいる隙間に妖夢が押し込められているようにも見えた。人混みの向こうからも見える巨大な荷物の山に、通りの人々も思わず道を譲る。

そんな妖夢のすぐ後ろを、お手製の背負い籠を乗せた半霊がくっついてゆく。こちらも籠に溢れんばかりの雑貨を抱えていた。半霊と荷物を分担する事を思い付いたのは最近である。……どうせどちらも同じ自分なので相対的に負担は変わらないのだが。

「ええと……次は、と」

用意した買い物リストに視線を落とし、人通りを避けて通りの端に身を寄せれば、

「あ、妖夢」

「鈴仙さん」

通りの向こうから現れたのは見知った顔だった。薬箱を背負った永遠亭の月兔、鈴仙・優曇華院・イナバ。暑いからジャケツトを腰に巻き、薄い布地のシャツの袖を肘までまくったラフな姿である。

竹林の賢者こと八意永琳が、永遠亭の名前で置き薬の商売をしているのは周知のことだ。永琳を師匠と仰ぐ薬師見習いの彼女は、週に一度ほど契約している家を回って常備薬の交換と販売をしている。ついでに辻でも薬売りをしているのだが、こちらにも上々の評判だった。

いつも隣にいる相方の小さいほうのウサギの姿が見えないことを珍しく思いながら、妖夢は挨拶を返す。

「今日はお一人なんですか？」

「そうなの。てゐがサボったから時間かかっちゃって」

疲れた様子でぼやく鈴仙。長い兎耳はいつもよりも心持ちくたびれ気味だった。

鈴仙と妖夢は永夜異変以来の知己だ。あの終わらない夜の異変の最中に出現した真実の月の光に当てられ、狂気の眼を発症してしまった妖夢は、治療のため永遠亭へ通院することになった。鈴仙とはそれがきっかけで仲良くなり、気付けば幻想郷に住む数多くの人妖の中でも、一番気の合う話し相手となっていた。

よく永琳やてゐに振り回されてとばかりを受けている印象が強い鈴仙だが、彼女自身は決してそんな扱いを嫌っている風でもなく、無理難題を押しつけられたり、悪戯兎に騙されてぼやきながら懸命に走り回っている姿をよく見かけた。

妙に気が合うのは同じように無茶ぶりする主に仕えているという共通点があるからかもしれない。自分の事は棚に上げて、苦勞人だなあと思っている妖夢である。

「妖夢も帰り？ ちょっとお茶してかない？」

「うーん……」

魅力的な誘いに心が揺れる。ちらりと通りの時計を見れば、急いで戻らなければならないというほど切羽詰まっていらないが、それほど余裕があるとも言えない時間だ。

とは言え妖夢だって女の子だ。乙女の端くれとして甘いものの

魅力には抗いがたかった。

「……じゃあ、少しだけ」

「よし、じゃ決まりね」

にこりと微笑む鈴仙。この笑顔が忘れられず、最近ではわざと風邪をひいて永遠亭に行く理由を作ろうとする、後先を考えない若い男も出ているとか。

荷物を持つとしてくれる鈴仙に遠慮しつつ、二人はつれだつて里の大通りを抜け、一本奥に入った茶店の軒先へと腰を落着けることにした。表通りには地底産の珈琲や紅茶を出し、レコードで音楽を利かせ、夜には舶来の酒を振舞うハイカラなカフェも並んではいるものの、妖夢も鈴仙もあまり洋風の甘味は好まないのだ。割烹着の店員に妖夢は素甘、鈴仙は葛餅と渋茶を頼み、軒先に出された長椅子に並んで座る。

「うんっ……」

山と積み上げられた妖夢の荷物の隣、背負っていた菓箱を下ろし、鈴仙も肩を回して伸びを一つ。スカートの裾を持ち上げて、ぱたぱたと扇ぐ。礼儀正しいお嬢様方にははしらないと肩を潜められそうな仕草だが、鈴仙がすると不思議と様になっていた。

そんな彼女の言動の端々に、時折、訓練された兵士の仕草が覗くのを妖夢は知っている。

ある種の美学である剣士の戦い方とは違う、信条や心情など無視して効率よく相手を無力化せんとする合理的な暴力の振るい方。注意を怠らず、油断をせず、命も尊厳も戦略に組み込んで、準備を整えて淡々と決行する、厳格な判断。それは普段の鈴仙の性格

からは似ても似つかないもので、彼女が黙して語ろうとしない過去に関係ある事なのかもしれない。気になりはしたが、妖夢は今のところそれを尋ねたことは無かった。

「だいぶ暑くなったよねえ。ちよつと前まで妙に寒かったのに」

「そうですね。……ひゃんっ!？」

「んー……冷たくて気持ちいい……」

「れ、鈴仙さんっ」

答える妖夢の半霊を抱き寄せて頬を押し付け、そのひんやりとした触り心地に目を細める鈴仙。くすぐりたいし、どうにも気恥ずかしいので妖夢は常々止めて欲しいと言っているのだが、あまり聞いてくれる様子がないのだった。

初夏の陽気の今日は半袖でも汗ばむほどだ。そのうち梅雨がくれば冥界でもじめじめと鬱陶しい日々が続くだろうが、今は空も高く、輪郭のはっきりした雲がそこそこに見える。

「お待ちせしました」

「来た来たっ♪」

やって来たお茶に甘味をつまみながら、少女二人が集えば自然話も弾む。主の話、天気の話、最近ちよつと話題になっている里の貸本屋と、そこに出入りしている粋な女商人。やがて来るだろう次の異変の話、人気争奪戦を始めたという仙人や寺の面々。とりとめもなく話題は流れ、やがて妖夢の修行へと移った。

「……むぐ。……んー。恐怖心ねえ……」

「お恥ずかしながら」

少し頬を赤らめつつ、妖夢は鈴仙に、最近取り組んでいる恐怖

心克服のための特訓の説明をする。

「おぼけが怖いなんて、可愛らしくていいと思うけど……って話じゃないか。ごめんね」

「いえ。本当のことですから。……でもなかなか思うようになくて。なにか、良い方法はないかなと思っていました」

「うーん……」

鈴仙は腕組みをし、赤い瞳を閉じてしばし瞑目する。

「難しい話だなあ。恐怖とか、怯えみたいな感情を強制的にねじ伏せる薬つてのはあるけど……妖夢が欲しいのはそういうのじゃないよね？」

問われ、妖夢はこくこくと首肯する。

恐怖とは、翻せば生きたいという本能だ。怯えも恐れも、己を脅かす危機から自身の命を守ろうとする自然な心の働きである。無論度を越せば恐怖で身動きすらできなくなることもあるが、個が自己を維持するための必須の感情であることは疑いようがないゆえに、戦いにおいて何よりも大切なが、同時に酷く邪魔になるものでもある。何かを守ろうとする戦いであれば尚更だった。

鈴仙はゆっくり頷き、自分の眼を指差した。彼女の目は狂気の眼——人の心や感情を走査し操作する能力をもっている。

「私の眼の話になっちゃうんだけど、恐怖に限らず、感情っていうのは心の波、心理の波長の乱れて言いかえることができるの。だから、私はある程度それを動かすこともできる。……でもね、水面がいつも静まっていることがないように、心が波立たないってことは普通、ありえないことなんだ」

風が吹いたり、小石が投げ込まれたり、魚が跳ねたり、大地そのものが揺れたり。外からの要因によって心は容易く乱され、揺れる。その刺激が強ければ水面は大きく波立ち、時には器から溢れる事もあるだろう。

手の中の湯呑みを傾けて、鈴仙はほうと息を吐く。

「それを揺らさないようにするっていうのは、不自然っていうか……どうしたってあまり良くないことなんだよね。例えば、水面を凍らせたりにして、硝子みたいに硬く保てれば、少しぐらいの刺激ではびくともしなくなる。でも、もしそれに耐えきれないような大きな衝撃があれば、硬い心はそれを吸収しきれずに割れてしまうかもしれない。そうすると、内側に閉じ込められたものが一気に噴き出して、もつとひどいことになるの。いくら凍らせようとしたって、心を器の底まで完全に凍らせることはできないし、仮にそれが可能だったとしても、もしそれが割れるような激しい衝撃が来たら、今度は器そのものにまで影響が出るかもしれないんだ。

……それにね、揺れ動かない感情は、感情とは呼べないもの。正しいものじゃないから」

付け加えられた言葉は、強い実感のこもったものだった。あるいはこれも鈴仙の実体験なのだろうか。敢えて指摘することはせず、妖夢はじつと鈴仙の言葉に耳を傾ける。

「だから、外からの刺激に対して身を固めて、弾こうとするんじゃないって、外部からの刺激を深く受け入れて、それによって起きた波や乱れを無理に抑えついたりせずに、散らしてしまおうのが

正しいんじゃないかな。大きくて穏やかなうねりのイメージね。海の——って言っても分からないか、大きな湖の中に小石が落ちても、岸の波の揺れは変わらないでしょ？ そんな感じかな」

「……なるほど」

鈴仙の薫陶に、妖夢は深く頷いた。

「確かにそうかもしれませんが。言われてみれば幽々子様もそんな印象がありますね」

「うちの師匠と姫様もね」

くすりと微笑んで鈴仙。あー、あの境地は見習いたいわー、と赤い目と大きな耳を揺らして、鈴仙はなんとも味わい深い表情を覗かせた。憧憬と共に、朱に交わりたくないという複雑な感情があるようだ。

「まあ、そんな感じかなあ。見習い判断で申し訳ないけど、参考になればってことで」

「そんなことはないです、ありがとうございました」

謙遜する鈴仙に、妖夢はしっかりと礼を述べる。自分だけでは意識することでもできなかった目的に、漠然としたものであれイメージが生まれたのだ。それだけでも大きな進歩と言えた。

ぺこりと頭を下げる妖夢に、鈴仙は少し顔を赤くし、ずずずとお茶を啜っていた。

■三■

「……ん？」

歓談の最中、鈴仙が怪訝な顔をして大きな耳を動かした。つられて妖夢も彼女の視線を追えば、空を仰ぐ赤い瞳の先、遠く雷の音が響く。

同時、手の中の湯呑みに、ぽつりと波紋が広がった。

「雨？」

降り注いだ雫に顔を上げると、空には分厚い雲が立ち込めていた。地面にぽつぽつと雫が広がり、通りに落ちる水滴は見る間に連なつて、ざあと強い音を立て始める。

突然の雨は、たちまち通りの視界を霞ませる激しい夕立となった。荷物と薬箱を抱え、二人は慌てて茶店の軒下へと避難する。

「ひやああ……降るなんて聞いて無かったのに」

鈴仙も悲鳴を上げながら、食べかけの葛餅の器と湯呑みを持つて軒下へと駆け込んでくる。

隣に立つ彼女の湿った髪からふわりと良い香りが妖夢の鼻にすぐる。女の子らしいお洒落に関しては、妖夢よりも彼女の方がずっと得意だ。これまで修行と庭師の仕事に明け暮れる毎日でそんな事に興味を持たなかった妖夢が髪をいじるようになったのも、鈴仙の勧めがきっかけである。

「むぐ。夕立にしてはちよつと早いような気がしますね」

軒先から滴る雨雫から大荷物を濡れないようにしつつ、妖夢も残った素甘を頬張る。確か広場で見た龍神様の目の色は綺麗な白、予報では雨など降るはずはなかったはずなのだが――

通りを叩く雨音は激しく、空を覆う分厚い黒雲はみるみる空を薄暗く包み込む。里の上空に夜の切れ端が流れ込んだのかと錯覚するほどだった。時ならぬ豪雨に、通りを歩いていた人々も足早に近くの店の軒下へと駆け込み、荷物を頭上に、背中を丸めて家路を急ぐ。

黒雲の空と豪雨を見上げ、鈴仙は吐息。

「ちよつと、すぐには止みそうにないわね、これ」

「そうですね」

「……仕方ないかな。すいません、お茶、もう一杯貰えま――」

会話を遮るように、突如の閃光が瞬いた。

「ひやああ!!」

稲光が明滅し、空が揺れ、黒雲を引き裂くように走る雷鳴が視界に焼き付く。数拍遅れて雷音が鳴り響き、一瞬だけ雨音をかき消した。咄嗟に耳を押さえた鈴仙が、目をつぶって恐る恐る様子を見上げる。どうやら彼女は雷が苦手らしい。

「これは、本格的に降って来たみたいですね」

「うー……やだなあ……」

二人が揃って雨空を見上げたその時。悲鳴のような、叫び声のような。甲高い不気味な声が里の空に響き渡った。

――ひゅおおおおおおおお……う……。

雷鳴がなお唸る激しい雨の中で、なお強く、寂しげですらある鳴き声が鼓膜を震わせる。

「……っ!!」

同時、訳もなく胸の中を冷たい手で掴まれたような衝撃が妖夢を襲った。

背筋が怖気立ち、手足が強張り、歯ががちがちと震え出す。言い知れぬ恐怖が手足を縛り、その場に貼り付ける。

雨に煙る空の下、連なる通りの屋根の向こうに——ずしんと一際大きな雷鳴が響く。低く垂れこめた黒雲の中に潜むその存在を、白玉楼の庭師の感覚ははつきりと捕捉する。

軒を連ねる店の屋根の上に、音もなくそいつは姿を現していた。渦巻く黒雲の空に、血塗れの紅玉のようにぬめる、二つの輝きが灯る。屋根瓦を踏み締める逞しい四肢は、鋭い爪を備える虎縞。胴体は分厚い焦げ茶の毛皮に覆われ、背中には甲殻類めいた爪鎌と、くねる鱗の蛇の頭が、左右三対の非対称な6本の歪な翼を模している。そしてその尾は、丸太よりも太い碧の鱗を生やした大蛇であった。

まるで獅子のような鬣を纏う、猿とも鳥ともつかぬ異形の獣の頭が、牙を剥き出しにして大きく喉を膨らませた。

「……っ!!」

ひゅおおおお、と鳴り響く高い鳴き声に、胸を貫かれ、胎の中を揺き回されるような恐怖が湧き起こり、妖夢は思わず脚をもつれさせて後ずさる。

雷鳴が激しく鳴り響くと同時、雨の中に幾重もの輝きが生まれた。獣がその吼え声と共に弾幕を放ったのだ。

あ、と思うよりも早く飛来した光の鏝が、茶店の軒先にある日除けの傘を貫き、濡れた地面の土を深く穿つ。

「妖夢!」

即座に反応したのは鈴仙だ。手足が竦んで動けない妖夢の襟首を掴んでその場に引き倒し、流れるような動作で茶店の軒先で雨に濡れる長椅子を跳ねあげ、遮蔽を作る。長椅子の脚がばしんと飛沫を上げるよりも早く、月兎は腰に巻いていたジャケットから無骨な拳銃を早抜きして、屋根の上の獣へと向けて引鉄を引いていた。

これは弾幕ごっこではない。咄嗟にそう判断した鈴仙の意識の底で、薬物催眠と睡眠学習で刷り込まれた自己暗示リミッターが解除され、弾幕の威力と速度に課せられた制限が外される。実銃と何ら遜色のない、音速を超える弾速は、射出と同時に凌的を無慈悲に噛み砕く鋼の牙だ。

鈴仙の弾幕は、月の科学力が産んだ最新鋭の銃器を基にしたものである。格好だけを真似した指鉄砲でも扱う事は出来るが、実戦においては彼女は弾幕の精神集中に引鉄を使っていた。安全性の關係から携帯している拳銃は炸薬の光と音だけを出して薬莢を吐き出す弾幕専用のもの。それでも、使い慣れた銃を介して、鈴仙の弾幕はごっこ遊びとは段違いの素晴らしい破壊力と精度を叩きだすのだ。

油断なく長椅子の陰で遮蔽を取りながら、玉兎の狂気の眼が赤

い光を放ち、十字に閃く銃火が屋根上の黒い獣へと収束する。

濃む黒い檻のようなものを纏いながら、獣は巨軀を感じさせない俊敏さで屋根の上を鋭く跳ねた。屋根瓦が赤い弾幕の着弾に弾け、碎ける。

「ッ」

鈴仙の魔眼が輝きを増した。能力の出力を上げ、波長を読み取る目は雨の雫一滴一滴を解析し、その規則性と共に屋根伝いに跳ねる獣の着地点を正確に予測、軌道を修正し予測射撃を撃ちこむ。深紅の輝きを纏い、銃弾の速度も威力も一射ごとに増していった。弾幕の精度は黒い獣の回避を上回り、帯状に連なる弾幕の斉射が獣の表皮を捕えた。が、

「……硬い!？」

頭部に3発、胸に2発、左右の前足へ2発ずつ。容赦なく標的の行動力を削ぐ場所へ着弾を集めた弾幕は、獣の身体に触れる直前、黒い靄の放つ力場のようなものに囚われて弾ける。

獣は鈴仙を振り向き、吠え声と共に再び光の鏝を撒き散らした。咄嗟に鈴仙が撃ち放った弾幕のいくらかが鏝を撃ち落とすが、貫通力を持った鏝は長椅子を易々と貫いて碎く。

数発の着弾で椅子は木片に姿を変え、無残な残骸を晒した。その威力に鈴仙も顔色を変える。

「四十五口径より威力あるんじゃないの、これっ」

罵声を打ち消すかのように追撃の光の鏝が撃ち込まれる。獣の行動にスペルの宣言はなく、ただ能力を使って弾幕を撒き散らすばかり。現在の幻想郷において許容されることのない、規範を逸

脱した攻撃だ。

空が唸る。俄かに強まった風が吹き付け、豪雨が鈴仙の顔を強く打った。思わず目を閉じかけた鈴仙のすぐ鼻先の空に、猛烈な落雷が叩きつけられた。

「ッ、きゃ……」

獣のシルエットが夜空に浮かび上がる。再度の鳴き声と共に、人里に瘴気が吹き付け、軒先の看板が割れ、暖簾が吹き飛び、積み上げられていた荷物が崩れ落ちる。気の弱っている者ならば、目にしただけで意識を失いかねない強烈な圧迫感が膨らむ。

鈴仙の悲鳴で、妖夢はようやく己を取り戻した。ほとんど無意識の動作で背中に手を回し、楼観剣の鞘で獣の放った弾幕を斬り払う。

「済みません! 鈴仙さん、援護をっ!」

呆けていた事への後悔をねじ伏せ、妖夢は通りに飛び出した。戦場へと躍り出た新たな標的に、獣はすぐに狙いを変えた。無数の光の鏝が呼び起こされ、庭師めがけて降り注ぐ。それを見事な足捌きで掻い潜り、妖夢はほとんど身体を動かさず跳躍。通りの中央でちゃんと水飛沫が跳ねたかと思うと、少女の姿は既に屋根上にあっただ。

ひと飛びで屋根の上に飛び上がり、背中から外した楼観剣の鞘を腰に、妖夢は獣と対峙する。不機嫌に吼える獣を、鈴仙の弾幕が牽制した。

雨に濡れた屋根の上を、足場の悪さを感じさせない見事な足捌きで疾駆、鋭く身を沈めた妖夢が腰のための太刀を振るう。

まさに一閃。踏み込む爪先が屋根瓦の上を滑り、一つ大きな波紋を刻むと同時に、吹き荒ぶ豪雨の雨粒が筒状にくり抜かれていた。二百由旬の庭を縦横無尽に走る神速の踏み込みで居合いを放ち、少女は獣の背後へと駆け抜ける。ひと振り十殺の楼観剣が、四尺七寸の刃をもつて怪物の肌を捕えた。

——だが。

「……ッ!」

異様な手応えに妖夢は声を上げそうになった。確かに獣の根元に食い込んだはずの切っ先が、ぬるりと泥の中に沈むように飲み込まれたのだ。

白刃が獣の首をすり抜け、虚しく空をかく。何としたことか。間違はなく首を落としたはずの楼観の太刀は、獣にさしたる痛痒すら与えていなかったのである。

おもわぬ空振りに少女の体が傾いだ。怪物は狙い澄ましたように低く身を伏せ、撓ませた四肢に溜め込んだ力を漲らせて跳躍する。

「危ないっ!」

鈴仙の悲鳴が上がる。同時に閃く銃火はしかし、獣を押しどめる些かの役にも立たなかった。獣が牙を剥き出しにして妖夢を丸飲みにせんばかりに迫る。

汚れた牙が少女の肌に食い込む寸前、獣は真横から殴り飛ばされたように強い衝撃を受けて仰け反った。妖夢が繰り出した半霊の体当たりが獣の体勢を崩したのだ。

ぐらりと身を傾がせた獣だが、吹き付ける雨をものともせず

しなやかな身体を翻し、宙をくると回って二つばかり向こうの屋根の棟瓦の上に着地する。見上げるほどの巨体をまるで感じさせない身のこなしであった。

「……………」

辛うじて難を逃れ、間合いを取る妖夢に、ざあ、と雨風が叩き付ける。視界を塞ぐ豪雨の中、妖夢は楼観剣を正眼に、切っ先を獣に向けたまま対峙する。

獣が再び不気味な鳴き声を上げた。すると見よ、突如として空から沸き起こるように黒雲がなびき、獣の体を包み込んでゆく。天に渦巻く雲はますますその分厚さを増し、獣の姿を雨霞の向こうへと覆い隠していった。

「待て!」

逃げられる。焦りの中、妖夢が獣を追って前に飛び出そうとしたその時だ。黒雲の奥から、これまでよりもさらに強く、ひゅおとおと不気味な鳴き声が響き渡る。その得体の知れない声が、言いかげの無い恐怖を引き起こし、少女の手足を凍ませた。こみ上げる恐れが冷たい鎖となつて庭師の手足を縛りあげる。

その一瞬の隙を獣は見逃さない。一旦退くと見せかけた獣は身を翻し、黒雲の中から妖夢に飛びかかった。背中から生ええうねる蛇の群れが、鎌首をもたげて妖夢へと襲いかかる。

「っ」

わずかにタイミングをずらして牙を走らせる蛇の頭を、妖夢は構わず楼観剣で切り飛ばした。刃が振り抜かれたその瞬間を狙い澄ましたかのように、獣の頭は弾幕を撃ち込んでくる。鎌の連射

は容赦なく妖夢の胸と頭を狙っていた。鞘を跳ねあげて首と頭を守るが、全ては防ぎきれない。鈴仙も弾幕で牽制してくれたが、2発は避け切れず肩と脇腹を掠めた。

着弾の衝撃に呻く妖夢の足が、同時にぐんと引っぱられる。地面を穿った光の鱗が翼の生えた小さな蛇に姿を変え、妖夢の足を絡め取っていたのだ。脚を取られ、背中から倒れ込んだ妖夢へ獣が圧し掛かる。

「つぐ……ッ」

「妖夢！」

巨体の突進を押しとどめられず、妖夢は屋根瓦に押し倒された。背中を叩きつけられて一瞬、意識が遠のく瞬間に、虎の前脚が凄まじい重量で少女の体軀を押し潰し、猿じみた異形の頭が長い牙を覗かせて、喉笛を噛み切らんと眼前に迫る。

楼観剣を辛うじて獣と己の身体の間に滑り込ませる妖夢だが、一振り十殺の刃が首筋に食い込むのをまるで意に介さず、黒い獣は妖夢へ迫って来た。

踏ん張りの効かない両手に力を込め、懸命に刃を立てて、妖夢は叫ぶ。

「どういう、つもりですか——ぬえさんっ！」

「ふん、やつと気付いたのか？」

屋根の上に妖夢を押し倒しながら、獣が唸るような声で答えた。聞き覚えのある彼女の声とは全く違う——胎の底に響くような吠え声だ。

獣の姿を取り巻く、渦巻く赤黒い雲、わだかまる闇のような毛

皮がモザイク模様に歪み、その奥から一瞬、黒衣の少女の顔が覗く。それは間違いないく、封獣ぬえ——妖夢が先日、倒したばかりの妖怪、鵠であった。

「お望みどおり、本気で相手してやろうってんだ、感謝しな」

嘲るように口元を歪め、少女の姿はすぐに元通りの虎の四肢と貉の身体、猿の顔を持つ異形へと飲み込まれた。ぎしり、先程にも増して凄まじい力が楼観剣を押し戻し、黒い獣の巨軀は妖夢を押し潰さんとする。

——これが、あの時あつさり負けて泣きべそをかいていた妖怪と同一人物だというのだろうか。

何故、どうして。混乱の中、脱出の隙を作ろうと半霊を繰り出す妖夢だが、ぬえは尻尾と翼を振ってそれをあつさりと振り払い、至近距離からの鈴仙の銃撃を喰らいながらも涼しい顔だ。

ぴよと吹き付ける風が、妖夢の視界を覆う。

「わぶっ……」

「お遊びは抜きだ。正体不明の恐怖におびえて死ぬがいい！」

高らかな笑い声と共に、雷光が鳴り響いた。ぎりぎりとして押し迫る獣の牙は、妖夢の肌へと食い込み、ぷつりと皮膚を裂いて赤い血の玉を浮かばせる。獐猛な獣のあぎとから吹きこぼれる生臭い吐息、頬に垂れる唾液に、妖夢は雨雫の入ってぼやける視界の中、今まさにぬえが自分の頭を食い千切らんとしていることを悟る。

同時——

ぐにやりと周囲の視界が歪んだ。恐怖にめまいを起こしたかと訝る妖夢だが、いつまで待っても牙が肌に胸に食い込み引きちぎ

る感触がやってこない。

「……………」

痛む目元を擦ってみれば、押し掛かる獣の重圧もない。いつの間にか目の前に迫っていた獣は姿を消していた。それどころか吹き付ける嵐も、雨も、嘘のように収まっている。

「——助かつ、た？」

背筋を嫌な冷たさが這い降りてゆく。どくどくと胸が激しい鼓動を打ち、震える指先に感覚が失せていた。辛うじて倭観剣を取り落としただけはせずに、どっと溢れた汗をぬぐい、警戒を緩めぬままゆっくりと身を起す。

「妖夢、平気!？」

駆けつけてきた鈴仙が差し出した手を握り——妖夢はようやく、自分がありえないほどしつかりと倭観剣の鞘を握り締めている事に気付く。震える脚を叱咤してどうにか立ち上れば、里は不思議な静寂に包まれていた。

「——これは……?」

「心配には及ばない」

割り込んできた三つ目の声に、思わず身構える妖夢だが——鈴仙は落ち着いてと庭師の肩に手を置いた。

「無事か、二人とも」

泥跳ねに汚れた綾目模様のスカートを翻し、大陸風の帽子は水滴をこぼし。紺の混じる白髪も濡れるままに、半人半獣の里の守護者が姿を見せた。

歴史喰いの半獣、上白沢慧音は、二人に敵意のないことを示し

つつ、歩み出る。成程、彼女であればいち早く里の異常を察知し手を打つことは可能だっただろう。

「里の歴史を隠して、皆を避難させた。驚かせて済まなかったな。説明している暇はなかったんだ。あいつも別の歴史に放り込んでおいたが——おそらくは気休め程度だろうな」

今日が満月なら話は違っただろうが——と、ぬえの消えていった方角を見上げて苦い表情を滲ませる慧音。歴史を操る靈獣白澤の力を持つ彼女だが、その身が示すように半人半獣である彼女には、それを自在に振るう事が出来る機会は非常に限られている。「お前たちが喰いとめていてくれて助かった。私ひとりでは手が足りなかっただろう」

深々と頭を下げる慧音に、しかし妖夢は情けない気持ちで一杯だった。アレは本来、妖夢が独力で対すべきものであったはずなのだ。

「……なんなの一体、今の?」

「聞いている限り、鶴と呼ばれる妖怪の特徴に酷似している。恐らくは彼女の本当の力なのだろうな」

腕組みと共に吐息して、慧音。白澤は、古今東西のあらゆる悪鬼妖魔の知識と、その避邪法を教えることされる靈獣である。ワーハクタクたる慧音は見事、里を襲った相手の正体を看破していた。顔は猿、体は狼、尾は蛇、手足は虎。蠢き激む瘴気を纏い、その姿を不定形に震ませる正体不明の化け物。

鶴は、二条帝と近衛帝の御世に京の都は清涼殿に現れた化物だ。名の由来は凶兆を呼ぶトラツグミのような声で鳴き声であり、聞

く者を恐慌に陥れたという。恐らく妖夢を恐れさせたのはこの声であろう。

宮中に響くこの声について帝も病に伏せるに至り、これを討たねばならぬと声が上がった。選ばれたのは古今に比類なき射手と名高い、三位入道源頼政。彼はわずかな供と雷上動なる弓、二矢をもつて黒雲渦巻く清涼殿に挑み、見事鶴の正体を見極め、その身体を射抜いたのである。

かくして都を覆う黒雲も晴れ、討たれた鶴は頼政の従者、猪早太によつて首を落とされ九つに裂かれ、二度と甦らぬように空木船で海へと流されたと伝えられる。

「……そんな事が分かったところで、今は何の役にも立たないが」悔しさを滲ませ、慧音は黒雲渦巻く空を見上げる。今回のぬえの凶行は慧音にも予想外であつたようだ。

「以前から、里での悪戯は目に付いていたんだ。聖殿にも頼まれていたし、餓鬼大将をからかうくらいなら大目に見るつもりでいたが、ここまで大仰に暴れられると、流石にな」

苦笑。慧音はこの騒動を、己の責任だと感じているらしい。いかにも妖怪と人との共存を目指す、里の守護者を自称する彼女らしい責任感だった。

「最近、妙に苛立っている様子だったが……こうなる前に気付かなかったのが悔やまれるな。先日も悪戯兎に騙されて、かなり荒れていたようだったが……」

「あの馬鹿……」

慧音の独白に、今日里に来たがらなかったのはそれでか、と鈴

仙は呻いて顔を覆う。

「しかし、せめて理由でも分かれば——」

慧音の話を遮って、妖夢は申し訳なき一杯で小さく拳手をする。

「あの、慧音さん」

「ん？」

「……多分、私が原因です」

かいつまんで経緯を話す妖夢に、慧音は小さく唸り、渋面を浮かべる。発端となった身としては心苦しいばかりだ。

黙考してしばし、里の守護者はゆっくりとかぶりを振った。

「いや、たとえ事情があるにせよ、これはやり過ぎだ。里を巻き込んで、命名決闘にも則らずに私闘を仕掛けるのはどう言い訳しても許容できる範疇を超えている」

本来、異変というのは人里を直接巻き込まないように配慮するべきものだ。異変を起こす妖怪の側もそれを心得ていることが嗜みとされているが、反発が全くないというわけではない。古くからの妖怪の中には何故人間である巫女の定めた規範などに従わねばならぬのかと公言する者も少数だが存在しているし、常に新参を招いている現在の幻想郷では、腹の底では不満を抱えている連中は少なくないのだ。

「正体不明と言う能力の関係上、命名決闘そのものに馴染まないというのもあるかもしれないな」

はあ、と深く吐息して慧音は頭を抱えた。

「済まないが二人とも、手を貸してもらえないか。彼女の能力と私の能力は相性が悪い。本音を言えば、できれば博麗の巫女が出

張ってくる前にケリをつけてしまいたいんだ」

人里に妖怪が襲来して大暴れした、などというのはそれだけでもスキャンダルだ。挙句、博麗の巫女が現れればそれは本当の異変となってしまう。できる事ならばその手前で穏便に済ませたいというのが慧音の希望だった。

これは何もぬえの事を慮ってばかりではない。本来、妖怪が襲ってはならないとさせる人里に、命運寺の妖怪が攻撃を仕掛けたという事実は、他の不満分子たちを引き寄せるに十分だ。信仰を狙って対立を深めている勢力達の事もある。危機を未然に防ぐためには、全てを『なかったこと』にしてしまわなければならないのだ。

「……解りました」

「妖夢、いいの？」

あつさり頷く妖夢に、鈴仙は目を丸くする。たった今、手も足も出ず仕留め掛けられたばかりではないかと、視線が強く語っていた。それは分かる。間違いない、鈴仙の言っていることは正しかった。けれど。

「私が原因みたいなのは、それに……私にも、いい機会だと思えます」

一瞬、呆気にとられた慧音だが、すぐに事情を察したのか、済まないと頭を下げた。

「私は里に被害が出ないようにするので精一杯だ。大した補佐は出来ないかもしれないが――」

「大丈夫ですよ、私は強いですからね」

努めて軽く――虚勢と悟られないように、妖夢は言う。

「頼む。最悪、博麗がやってくるまでの時間稼ぎでも構わない」  
慧音の忠告にはいと頷いて、妖夢はゆつくりと身を起す。気合を入れるためばしんと頬を叩き、ぐつと奥歯を噛んで、全身から怖れを追い出した。

「……すみません、鈴仙さん、巻き込んだじゃったみたいで」

「いいって。どうせ乗り掛かった船だしね。……原因の一端はウチの悪戯鬼にもあるみたいだし、手伝うわよ」

諦めたようにちよこんと肩を竦めてみせる月兔。巻き込まれる事には慣れているとばかり、小さくウインクをしてくれる。出来の悪い妹分を庇うような口ぶりだが、幻想郷でも屈指の長寿である当の本人には心外であるだろう。

「……………」

妖夢はまだ震えの残る指で腰の二刀の柄を握り、決意と共にじつと、黒雲渦巻く里の空を見上げた。

## ■四■

上白沢慧音の歴史を隠し、改竄する能力は強力だが、それは決して万能ではない。強い力を持つ存在は別の世界線にあっても同様に歴史に影響を及ぼし、世の流れを己の元に引き寄せるからだ。英雄とは自身の意思で因果や宿命を捻じ曲げるものだが、こと幻想郷においては神話伝承の英雄や神霊、それに比する怪物が石を投げれば当たるほどにひしめいている。

加えて、ぬえの正体不明を操る能力は記述と記録を根拠とする慧音の歴史干渉とは非常に相性が悪い。正体の定かでないものは正しく記録し留めておくことができないからだ。能力を操り自身の存在すら不確定としたぬえは、ほどなく元の歴史へと帰還した。闇とも霧ともつかぬ黒霧を纏った獣の姿をとり、ぬえは広場の龍神像の上に陣取っていた。幻想郷の創設者たる一柱をも踏み付けて、平安京の夜を脅かした大妖怪は傲岸に妖夢を睥睨する。

「白玉楼剣術指南、魂魄妖夢。お相手します」

「ふん。逃げ出さずにやってきたのは褒めてやる」

改めて名乗る妖夢を睨みつけ、ぬえはトラツグミの鳴き声を上げた。黒雲が呼び起こされ雷鳴が跳ねる。溢れだした瘴気が風雨となって妖夢に叩き付けられた。

凶兆を報せる鶴の鳴き声は、心を揺らす恐怖の声。一鳴は妖夢の決意をやすやすと貫いて恐れを呼び起こした。肌を這い上がる

悪寒に少女の手足が凍む。

「く……ッ」

唇を噛んで、痛みをもつて恐怖を押しとどめる。分かっているがやはり自分は臆病だ。自覚とともに気合を上げ、妖夢は楼観剣を抜き放った。名物・十夜斬楼観じふやざんろうくわん四尺七寸の白刃が閃き、風雨に紛れて襲いかかる緑蛇の群れを斬り払う。

「そこだ！」

黒雲の中に身を隠そうとしたぬえを追いかけて、剣閃が宙を翔んだ。胎の底から絞り出した気迫と共に振るわれた雨粒が両断され、雲を斬り払って道をつくる。胸中の怖れを振り払い、妖夢は大きく前へと踏み込んだ。

ひと振り十殺の切っ先が路地から飛び出した化け物の喉を突く。裂帛の気合が渦巻く黒霧を吹き飛ばし、露わになるのは首を串刺しにされた鶴の姿。

——が。

喉を貫かれた獣の姿がぶれ、ぬえの表情が一瞬覗き、にやりと笑みを覗かせる。

同時、確かに仕留めたはずの手ごたえは、ぱきんと碎ける硬い衝撃と共に消し飛んだ。

——正体不明「紫鏡」

喉を刺し貫かれた鏡像が、破片になって碎け散る。刺突の勢いを殺しきれず、妖夢は鏡の破片に突っ込んだ。

あ、と声が出るよりも早く、横殴りの重い一撃が少女の身体を吹き飛ばす。水たまりを蹴散らし、庭師の身体は広場に面した雑貨屋の雨戸を突き破って店内に転がった。ずしんと突き抜ける衝撃と共に、商品を満載した棚が将棋倒しになって妖夢の上に倒れ込む。

「……ぐ……あ」

強烈な一撃に頭を揺さぶられる中、意識を手放さぬように妖夢はきつく唇を噛んだ。

げほ、と咳き込めば右のこめかみに激痛があった。ざくりと裂けた額から、血が溢れ出す。

咄嗟に楼観剣の鞘を跳ねあげて盾にしなければ、妖夢の頭は石榴のように砕けていたに違いない。見事二つにへし折れた鞘に背筋が寒くなる。ぬえの前脚は、文字通り虎の膂力だった。——妖夢は一度も本物の虎と戦った経験はないのだけれど。

このまま閉じ込められたらあの鏢弾の餌食だ。妖夢は倒れた商品棚を半霊で押し上げ、辛うじてできた隙間から痛みを堪えて身体を引き抜く。店の入口へ駆け出そうとしたところで踏みとどまり、妖夢は素早く方向転換、店の裏口から路地へと飛び出した。咄嗟の判断は正しかった。一瞬遅れて光の鏢が店の中へ叩き込まれる。

店を破壊する激しい着弾音を耳の後ろに聞きながら、路地をジグザグに走って壁を駆け上がり、側転と共に半鐘の吊るされた火の見櫓の上へ。

荒れ狂う嵐の中、ひゅおおおと不気味な鳴き声が風雨に混じっ

て響く。上空には既にぬえの姿があった。雷鳴を背負い、うねる黒雲を纏って、咆哮と共に放たれる白い光弾が妖夢を取り囲む。櫓を足場に跳躍した妖夢の背後で、半鐘が着弾に打ち抜かれてけたたましく鳴り響いた。

「つあああああ!!」

渾身を込めた兜割りの一撃を、獣は後ろに退いてかわす。

刹那。

「——もらった!」

虚空に溶ける様に現れた鈴仙が、そこに出現した。波長をずらし、気取らせずに接近した彼女の構える銃口には、眩いほどの紅い輝きがある。鈴仙はぬえの首の後ろに取りつき、零距离からの溜め撃ちを叩き込んだ。もはや砲撃に等しい口径の貫通弾が、轟音とともにぬえを地上に撃ち落とした。

だが、それも獣の身体を覆う不可解な靄を破るには至らない。唸るように背を捻ったぬえが、背の翼を広げて逆立てた。甲殻類の爪鎌が鈴仙の胸を薙ぎ払う。

「悪いけど、幻影はあんたの専売特許じゃないのよ!」

その時には月兎の姿はぬえの真横にあった。見開かれた狂気の花が出力を増し、閃光をもつて離円の花冠を描く。重なる赤い光輪が、ぬえの喉を撃ち貫いた。

光の輪に、ぬえの纏う黒い靄が激しく揺らぐ。鈴仙は黒い獣の姿を形作る正体不明の能力を力づくで突破しようというのだ。狂気の魔眼の輝きに黒靄は削られ、がりがりと激しい火花を散らす。このまま押し切れるか——妖夢が淡い期待を抱いた時だ。

「きゃ——!?!」

空から突如吹き下ろした突風が、鈴仙を襲う。風に舞う落ち葉のように吹き上げられた玉兎の視線が外れ、獣は狂気の魔眼から逃れていた。不安定な姿勢から銃口を閃かせる鈴仙に対し、対するぬえの動作は単純なものだ。着弾など気にせず、黒い靄を纏う巨体をくねらせ、そのまま鈴仙を体当たりで吹き飛ばしたのだ。

「かはっ……」

ぬえの獣のごとき俊敏さに、悲しいかな射手の体術では追いつきされない。虎か戌亥か、巨大な肉食獣の体躯をもつ獣に突き飛ばされ、鈴仙の身体は梁上を転がる。長い髪が水滴を散らし、身体ごと叩き付けられてなお瓦を砕くほどの強烈な一撃。屋根から転げ落ちそうになった鈴仙は上半身だけで庇に捕まって、なおもぬえに銃火の斉射を浴びせかけた。

しかしそれらも全て、黒い獣の身体には届かず弾かれる。

「……これでも、効かないの……ッ!?!」

無理な拳動で肺を痛めたか、鈴仙が激しく咳き込んだ。弾幕が途切れ、照準が乱れる。

(まずい!)

鈴仙に迫らんとするぬえの前に、妖夢は強引に割り込んだ。

手首を返し楼観剣の切っ先を閃かせるが、黒い獣は閃光のような刃をするりと掻い潜り、反撃の牙を繰り出してくる。大きく開かれた大猿の顎が、妖夢の鼻先でがちんと噛み合われる。半霊を割り込ませて距離をとったすぐ眼前で、獣の牙ががりりと火花を散らす。

「く……ッ」

屋根から滑り落ちそうになる鈴仙を庇い、妖夢は楼観剣の刃を獣の右肩にねじ込んだ。それでもなお獣の巨軀と小柄な妖夢では勝負にはならない。

刃をものともせず、ぬえは大きくあぎとを開いた。

雨の打ちつける瓦の上では、思うように踏ん張りが聞かない。じりじりと押し込まれながら、凄まじい力でぬえの爪が、牙が眼前に迫る。

吹き付ける雨風が妖夢の視界を奪う。雨の混じった血が右目にぬるりと入り込み、視界を紅く染める。濡れぼそった服は手足に張り付き、自由な動きを阻害した。泥を跳ねさせ、滑る屋根瓦を、濡れる戸板を蹴って走る度、手足には余分な負担がかかる。

「っ、あ、あああ!!」

がきりと楼観剣を捻り、妖夢はひざをかち上げて獣の喉に喰い込ませた。さらに加速させた半霊を叩きこんで、どうにかぬえの巨軀を跳ねのける。

「っ、は……、はあ、はあ、はあっ」

いつしか妖夢の身体は、雨の中湯気を発するほどに熱を籠らせていた。

荒い息が喉を突く。額の出血は弱まる様子を見せず、ぜいぜいと肩が上下し、濡れた口元が空気を求めて歪む。冷静さを欠いていると自覚こそすれ、思うように付いてこない手足が焦燥をさらに深くした。

押し返されたぬえは、再び黒雲の中に姿を消した。闇に身を隠

しての一撃離脱が、彼女の戦い方であるらしかった。

身を丸めて咳き込む鈴仙を背に庇い、妖夢は油断なく周囲に気を配る。黒雲に覆われた空と激しい雨。薄闇の中、どこからともなく姿を消し、現れる不定形の化け物に、妖夢は攻めあぐねていた、刀を振るう手足にも余計な力が抜けない。

「つ……はあ、つ」

濡れた髪をしたたる雫が目に入り、長い太刀は雨に濡れ、四尺七寸の切っ先がわずかにぶれる。妖夢がその小柄な体格で楼観白楼の二刀を同時に扱えているのは、日々のたゆまぬ修練が為せる業である。

それでも、この刀は本来、まだ手足の伸び切っていない少女の体躯には長大過ぎる得物だ。暴風の悪天候、雨風に晒されながら、いつ襲われるとも分からない状況で気を張り詰め、長時間の戦闘は激しい消耗を招き、白玉楼の守りの要たる彼女の剣の冴えを衰えさせていた。

顎を伝い落ちる雨雫、額に張り付く前髪。溢れた血が頬を流れ、片目に入り込んでずきりと痛む。ぶれた切っ先を構え直し、妖夢は緩みそうになる意識を張り詰め、緊張を繋ぎ止めた。

ぬえの攻め手は周到で執拗だ。相手に緊張を強い、消耗させたところで襲いかかる。一つの動きにはいくつものフェイントが織り交ぜられ、隙をこじ開けて強烈な一撃をねじ込んでくる。刹那の油断が命取りとなる、真剣勝負——暴風雨の中の対峙は妖夢の一方的な消耗を招いている。

加えて地の理は相手にあると言っている、無闇に追いかけまわ

そうとも疲弊を招くだけだろう。泰然と構え迎え撃つのが一番の上策だと、妖夢は考える。

が、こうして気を張り詰め、襲撃に備えることは、ぬえの狙いであると、妖夢は気付いていた。

ぬえの力の源は、正体不明の恐怖に怯える心だ。どこから襲いかかってくるか分からない相手に心を張り詰め、疑心暗鬼を生じ、平静を乱せば乱すほど、彼女の力は増してゆく。惑わされてはならないと、妖夢は己を叱咤する。

(楼観剣じゃ、斬れない)

静かに認める。一振りで妖怪十人を斬り殺す刃は、鶴の纏う不可解にして正体不明の毛皮に全て阻まれ、その奥へと触れる事すら叶わなかった。

(斬れないのは、私が、相手を見極め切れないからだ)

決断という言葉も、断定という言葉も、そこに断つという意味を含めている。すなわち、斬るとは相手を見極め、ひとつのものをふたつに見切る手段であった。

見えず掴めず聞こえないものが、未熟者に斬れないように——妖夢はいまだ、ぬえという妖怪を見切れていない。ならばいかに剣を振り回そうとも、斬れる道理がない。

「……それなら」

妖夢は左手を楼観剣の柄から放し、腰の裏の短刀へと添えた。湧き起こる黒雲から、稲光が落ちる。閃光が白黒に映し出す一瞬の中、鋭く突き出した楼観剣の切っ先がぬえの鼻先を捕える。がきりと牙と白刃が噛み合う。

同時、吠える怪物の懷に身を寄せるように、妖夢は腰から白樓劍を抜き放った。

普段の弾幕ではほとんど使用することのない、魂魄家の伝える劍、迷いを断つ短刀が、逆手に鶴の首元へと付き込まれる。

### ――炯眼劍。

本来は、白樓劍で受け樓觀劍で返し、相手の獲物をへし折る、攻防一体の因果<sup>カウシタ</sup>の劍。それを左右逆の刀でこなしたのだ。

迷いを振り分ける魂魄家伝来の刀は、ぬえの首元に刃元まで深々と食い込んだ。

――食い込んだ、だけだった。

黒い獣の首元に穿たれたまま、白樓劍はびくりともしない。惑いを振り分ける刀と、ぬえの正体を不明にする力。二つの相反する能力はびたり拮抗していたのだ。

「そんな……!？」

まさかの結果に、妖夢は目を剥いて叫ぶ。思わぬ罅迫り合いに妖夢は一瞬、動きを躊躇った。

「ふん。そいつなら私を斬れると思ったのか? ……思い上がるなよ、未熟者ッ!」

それを見逃すぬえではない。獣は身体をくねらせ、首に食い込んだままの白樓劍を妖夢の腕から引っこ抜く。雨に濡れた手が柄頭からすっぽ抜け、少女の身体は宙を泳ぐ。

そこに――丸太のように太い、鶴の蛇の尾が叩き付けられた。

「っあ!？」

「……、妖夢っ!」

鈴仙が手を伸ばすが間に合わない。どしやり、屋根上から地面に叩き落とされ、頭から泥に突っ込んで、妖夢は地面を転がる。

反射的に跳ね起き、残る樓觀劍を構えようとするが――太腿に走る激痛に、思わず刀を取り落としかけた。ふくらはぎに深く、ふたつの孔が空いていた。箸の先程の大ききの孔は、血を噴き出すことなく、見る見るとす黒く腫れ上がる。

（――毒、?）

ぬえは、その尾から伸びる蛇の牙をあのすれ違いざまに妖夢の足に突き立てていたのだ。

樓觀劍を支えに足を引きずるように懸命に起き上がる妖夢に、高らかな笑い声が響く。

「あつはつはつは! なんだよその様は! なにが劍術指南だ、刀がなきゃ何にも出来ないくせに、よく抜かしたな!」

びようと、鏃弾を交えて瘴気を孕んだ重苦しい風が吹き付ける。傾いた家屋がみるみる朽ち腐り、妖夢を押し潰さんと崩れ出す。片足を引きずって辛うじて身をかわず妖夢だが、それでも避け切れず、鏃の数発が少女の背中を直撃した。

「折角だ、もっと虐めてやる!」

ぬえが言うと同時に、小さな羽根を生やした蛇が飛び来る。右足の痛みを堪えて避けようとした妖夢だが、蛇は最初から妖夢を狙ってはいなかった。妖夢が辛うじて握り締めていた樓觀劍、白樓劍の柄が、思い切り跳ね飛ばされる。

油断だった。汚れた視界を拭い、泥の中に沈んだ樓觀、白樓の二劍へと手を伸ばす妖夢だが――その二振りを見る間にその輪郭

をばやけさせ、その姿を失う。

「え!?」

伸ばした手が掴んだもの、それは古びた竹竿だった。

竹、竹——無数の竹。まるで七夕の準備か、竿竹屋でも始めたかのように。妖夢の足元には無数の竹竿が散らばっている。

ぬえが己の能力を用いて、楼観剣と白楼剣、二振りの刀の正体を失わせたのだ。ぬえは器用に尻尾を動かし、細工物屋の裏手にあった籠をひっくり返してゆく。バラバラと飛び散る竹の中にまざれ、妖夢が探し求める二刀の姿はもはやどこにもない。

事態を把握し、蒼白になる妖夢に——頭上から高らかな笑い声が叩きつけられる。

「さあ、正体不明の恐怖におびえて、死ね! ははは、あ——っはっはっはっは!」

けたたましい怪鳥の笑い声。

風を斬って放たれる鏑。掴んだ竹竿を咄嗟に跳ねあげるも、ぬえの爪はそれを容易く両断した。こめかみを撃ち抜かんとする尻尾の大蛇の牙を、辛うじて竹の節で反らす。

同時に振り抜かれたぬえの前脚が、妖夢の頬を鋭くえぐった。半霊に助けられて倒れ込む事は踏みとどまるが、ぐわんぐわんと揺れる頭が平衡感覚を失って傾く。

(……まず、いつ)

ざわり。

眩む意識の先に、おぞましい気配があった。黒雲渦巻く天に広がる、これまでに倍するほどの赤黒い鏑の群れ——禍々しい呪詛

を纏うそれは、封獣ぬえという妖怪の根幹に根差した力であると、妖夢は瞬時に理解していた。しかし。

(……からだ、が、うごか、な)

毒に侵された脚では放たれた赤黒い鏑をモはや避ける事も敵わず、振るった竹竿は空しく空を斬り、逆に矢が深く妖夢の肩に突き刺さる。弾幕で作られた矢は、本物と寸分たがわぬ鋭さと威力を持っていた。鏑が肩肉を貫通し、肩が持つていかれそうな衝撃。

——腕が千切れなかったのは、幸運と言っている。

赤黒い鏑が脇腹を掠めた途端、そこから急速に熱が奪われてゆく。強張った筋が痛み、傷の痛みが二回りほど増す。雨の中の活動で動きを鈍らされた今、半分幽霊の妖夢にとつてもそれは致命的な攻撃だった。呪詛にまみれた鏑に付けられた傷はじゅうじゅうと焼けるように痛み、じわじわと傷を広げてゆく。

肩から、額から、脚から流れる血とともに、力まで抜け落ちてしまっているかのよう。勝ち誇るように、ひゅおおとおと鶴鳥の鳴き声が空に響く。

### ——恨弓「源三位頼政の弓」

驕る平家の専横に心を痛め、絶望的な兵力差を前におお拳兵して義に準じた、三位入道源頼政、悔恨の強弓。

怨念の呪詛を孕む無数の矢が、ぬえどりのなく空の下、もはや動けぬ妖夢の身体を捕えた。



「妖夢！」

痛む喉を押さえ、涙の滲む眼を擦って鈴仙が顔を上げれば、視界に入っただのは泥に塗れて二刀を失い、無数の矢にさらされる妖夢の姿であった。

雨霰と叩き付けられる呪詛の鎌を次々と受け、くずおれる少女の元へ、鈴仙は我を忘れて駆け出していた。

(……見え、ない……つ)

突き詰めれば光も音も波である。波長を操る程度の能力をもつ鈴仙にとって、いかなるものであろうとも自分の眼を通せば見定めることができるはずだった。しかし、ぬえは常にその身に纏う波長を、刹那の間に切り替え続けていた。一瞬たりとて同じ波長に留まらず、振動数も波形も振幅も変え、しかもそれが何重にも重なり合っているのだ。増幅し、打ち消し合う不定形の波長は、鈴仙の狂気の眼をもっても解除しきれなかった。瞬間瞬間の補足は可能でも、不連続に蠢く不定形の姿を、ひとつに定めることができないのだ。

(変更の周期、規則性さえつかめれば——ッ)

鈴仙は能力を全開にして、赤い視線の先に正体不明のげけものを見定める。玉兔の視覚神経が活性化し、薬理活性が神経伝達を加速させる。

耳元を呪詛を乗せた矢が掠め、靡く髪が千切れる、自分の周囲の位相をずらすのは最小限にとどめ、鈴仙は正体不明の能力のデコードに全力を割いていた。ぬえの正体不明の能力は、彼女本人の統制に基づくものではなく、彼女が作り出した『種』によって自動で付与される類のものだ。対象に埋め込まれた種は機械のように淡々と、解析できない不明の『場』を作り上げ、観測者の認識を阻害する。

月面での潜入工作・諜報活動の専門教育を受けた鈴仙にも手の及ばない自動無差別の無作為妨害。軍用暗号にも勝る情報構造と暗号強度を誇り、リアルタイムで解読するのは事実上不可能と言えた。

「ああ、もうっ！」

焦れた鈴仙はジャケットの内側から三本の試験管を引っ張り出した。

**生薬「国士無双の薬」。**月の頭脳、八意永琳が鈴仙に与えた、身体能力の劇的な向上をもたらす劇薬だ。使用者の身体に強力な活性を付与するが、一服ごとに身体にかかる負担も膨大なものとなる。服用からおおよそ数分間、使用者の能力は飛躍的に向上し、摂取回数に応じて増大する。しかし反復利用が可能なのは三服まで。四服目を摂取した瞬間、限界を越えた身体の方が魔力の暴発を起こして、服用者を含めた周辺に膨大な被害を及ぼす。

鈴仙は躊躇わず、三服をまとめて摂取した。皮下注射と異なり経口による摂取は粘膜からの吸収が主となるため、まず血流を介して神経系の加速が先行して起こる。思考だけが加速し、身体

動作を置いてきぼりにして意識だけが吹っ飛んでゆく。時間が粘性を帯びたように鈍くなり、手足もどかしいくらい遅くなる。

だがそれこそ、今の鈴仙にとって喉から手が出るほど欲しい、暗号解読のための思考時間だ。雨粒の一つ一つが識別できるほどに視覚が過剰に活性化し、耳は雨音一つ一つを区別する、国士無双の百倍加速の時間。それはまさに狂<sup>ルビアン</sup>気の領域。

高速稼働した玉兎の思考が、無数のシミュレートを開始する。

(……割と、身体張ってやってるんだけどなあ)

こんなものに頼らねばならない事自体、自分の力不足を際立たせる理由になるのだろう。そう思い鈴仙はわずかに自嘲する。

いくら比較しようともまったく自分の進歩を実感できないことまでもかしい。月における不世出の天才、八意永琳を師匠に持つてしまったことは、ある種鈴仙の不幸であった。

(よし、捉えた！)

相対的に百分の一に遅くなったぬえの能力に割り込みをかけ、強引に波長の制御を奪取。正体不明の種を隔離し、即座に致命的な波長を浴びせかけて焼却駆除。

見開いた魔眼を空に叩き付け、赤光とともにありつたけの幻覚を叩きこみ、こじ開けたぬえの能力に狂気の波長を干渉させる。

同時、弾倉が空になるまで左右の拳銃を連射。

ぬえの眉間と右眼、心臓と喉、そして脚。誤差1ミリで着弾をまとめて撃ち込んだ弾幕が僅かばかり化物の動作を遅くする。その間に、鈴仙は泥の中に滑り込むように倒れ込んだ妖夢の肩を抱えあげた。加速する意識に追従しきれない手足が悲鳴を上げる

が、無視。

眼前に迫る呪詛の鏃を銃把で叩き落とし、気力を振り絞って、地面に散らばる竹竿の中からふた振りの刀を識別、指が切れるのも構わずに右手に掴んだ。

よろよろと浮かび上がった半霊が追隨するのを確認して、鈴仙は思い切り地を蹴る。月面を跳ねる玉兎の脚は、薬理活性のブーストの助けを借りて凄まじい初速を叩きだした。砲弾めいて空へ跳ね、広場を離脱した鈴仙の背を追うように、ぬえの鳴き声と瘴気を纏う矢雨が降り注ぐ。

「こつちだ！」

吹き荒ぶ剣林弾雨の中、活性化された感覚は路地裏から顔を出した慧音の姿を捉えていた。彼女がわずかな余力で放ったスペルが発動し、ぬえの動きをわずかに留めている間に、鈴仙は妖夢を抱えたまま、路地へと駆け込んだ。

庇の下の乾いた地面に彼女を寝かし、その身体を檢める。

「妖夢！ しっかりして！」

庭師の少女は、全身至る所傷だらけだった。右目の上が深く裂け、左右の腕は身体を庇っていくつもの着弾に焦げている。深く裂けたスカートの奥、右の腿はどす黒く腫れ上がり、膝まで痛々しく膿んでいた。中でも肩を貫通し骨を砕いた矢創が一番ひどい。脇腹にも二本、浅くない矢創があった。

本物の矢であれば引き抜こうにも肉がからまり、骨が矢軸に食い込んで悲惨な事になっていただろうが——呪詛でつくられた鏃は直撃と共に実体を失う。その心配はないが——その分傷が剥き

出しとなり、むしろ出血は酷くなっていた。

「……………」

見る間に地面を赤く染めるほどの夥しい出血に、一瞬我を忘れかけ、鈴仙は懸命に悲鳴を喉奥に飲み込んだ。

実のところ、鈴仙は血や怪我を見るのが大の苦手である。そもそも穢れなき月に棲む玉兔は負傷や死と無縁であり、月の障りもない。血とは穢れの象徴であり、忌避されるべきおぞましいものでしかなかった。その上、鈴仙は月面戦争当時の事情もあって、重篤な負傷を目にするのは半ばトラウマである。

(落ち着け、意気地なし！)

失神しそうになる軟弱な自分の頬をぶん殴って、その痛みで理性を保つ。顔面蒼白、ほとんど無意識であったものの、玉兔の手はきちんと動いてくれた。師匠の厳しい仕込みは、混乱の中でも命を繋ぎ止める応急処置を可能にしていたのだ。

恨弓の名の通り、かつての恨みを核にしてぬえの放つ矢は、鎌の代わりに高濃度の呪詛を纏い、傷口にそれを押し込むものだ。国一つの中枢を傾けた呪詛は傷を深め発熱させ、負傷をじわじわと広げる効果も持ち、けして通常の手段での治療を許さない。達人の魔法でも治療は難しいだろう。

鈴仙は妖夢の身体に喰い込んだ呪詛を波長を操ってデコードし解毒。次いで場所を絞って魔眼を照射、波長を固定化して血を固化させ、大きな血管を塞いで傷口を覆う。さらに手持ちの造血剤と、脚の毒への血清を大量に投与。骨を砕かれた肩はどうしようもなかったのだ、袖を千切り、添え木と共に縛って固定する。

怪我也半分で済むし痛みも半分だけで済むという、半人半霊という妖夢の出自に頼った強引もいいところの処置だったが、それでもわずか九十秒の早業であった。国士無双の薬の薬効が残っていたのも、幸運に作用しただろう。

「……間に合ったか」

駆け付けてきた慧音に頷き、鈴仙は気付け薬を口に含み、口移しで妖夢の唇に流し込む。

「う」

妖夢がびくりと身体を竦ませ、呻きを上げる。自分がこんな怪我をすれば、まず十日は目を覚まさないだろうが、普段からの鍛え方が違うのだろうか、妖夢は目を開けると、ほどなく状況を察したようだった。

「大丈夫？」

「……油断しました」

げぼげぼと咳き込み、少なからぬ血の混じった痰を吐いて、妖夢は身を起こそうとする。目覚めるなり己の二刀を探そうとする彼女に、鈴仙は慌てて肩を押さえた。

「起きちゃダメ、絶対安静よ」

「そうも、言ってられないんです、……彼女は、私と戦うために来てくれた。最後まで、それに応えなきゃ」

「無茶よ！ 別にあなたじゃなかったっていいでしょ！？」 巫女だつて、他の誰かだって！

「我が儘なのは分かっています。でも」

妖夢は強くかぶりを振った。しかしこれはもう、弾幕ごっこ

範疇を超えている。確かに命やそれよりも重いプライドをかけて挑む決闘だつてあるだろうが、勝算も見えず、勝つことに利の無い相手に意地を通すことほど、無駄な事は無いのだ。

事実、路地裏にまで響く鶴の声に、今だつて妖夢の手は震えている。凶兆をもたらす鶴の鳴き声には恐怖を呼び起こす作用がある。鈴仙は音の波を阻害して防いでいるので被害を受けずにいるが、半分幽霊である妖夢には普通の人間以上に精神的な作用が強く影響を及ぼしているはずだ。

だが。  
それでも妖夢は、愚直なまでに鶴に、正体不明の恐怖に向き合おうとしていた。

「妖夢」

そんな庭師の少女の隣に屈みこんで、慧音は諭すようにじつとその顔を覗き込む。

「恐怖に屈せず、決して諦めないというのは正しいことかもしれない。だが、お前のしていることはただの蛮勇だ。訳もなく命を危険に晒すのは、勇気でもなんでもない。もう、自分で分かっているんだらう。……あれは、お前には斬れない相手だ」と

言われ、妖夢は口を嚙む。吹き荒れる風と響く雷鳴。勝ち誇つたように繰り返される鶴の鳴き声。

「……はい」

長い沈黙ののち、妖夢は静かに頷いた。

「確かに、私には、形の無いものを斬るのがせいぜいです。正体の無いものは——斬れません」

見えるものに惑わされぬようにするということは、相手の本質を理解するということだ。

相手を見定めぬ事が出来ぬ以上、妖夢にはそれを討ち取ることにはできない。理解の及ばない相手をそのまま斬る事は、あるいは彼女の師であれば可能であったのかもしれない。

「それでも、止めないのか」

「……………」

詰問のような口調の慧音に、しかし沈黙のまま、妖夢は刀から手を離さない。鈴仙の制止を払いのけ、ふらつく足を引きずって身体を起こす。

「すみません。……私の我が儘です」

「……理屈じゃないんだな。言つても無駄か」

慧音は深く吐息し、袖から一包の銀色の結晶を取り出して口に含んだ。わずかに彼女の姿がぶれ、荘厳な気配があたりに満ちた。彼女が懐から広げた巻物を一瞥すると、気付けば妖夢の身体は淡い光に包まれ、時間が戻るように傷が塞がってゆく。脱げていた靴もいつの間にか戻り、避けたスカートも元通り、鉤裂きも泥染みも消えうせ、雨に濡れてすらいない。

なけなしの刻符と、月阿片——非常用に確保していた満月の力を用い、霊獣白澤の力をもつて、妖夢の負傷の歴史を喰ったのだ。目を丸くしながら、妖夢は左右の手を握りしめる。

「一時的なものだ。あとで半月は寝込む事は覚悟しておけ」

「ありがとうございます、慧音先生」

「そういう性格との付き合いも長いからな。……これでもう私に

は余力は無い。支援は期待するな。……ああ、それと鈴仙」

立ち上がり、二刀を腰に刷き直す妖夢の隣。呆けていた鈴仙は急に話を振られ、鈴仙は驚いたように顔を上げた。

「へ？ 私？」

「この、雨を止めてもらえないか」

「雨？ 別にいいけど……どうやって？」

きょとんと瞬きをする鈴仙に、慧音は腕組みをして黒雲渦巻く空を見上げた。

「妖夢の戦いを見ていて気付いた事なんだが、この雨、明らかに不自然だ」

雷の鳴り響く風の空。それは如何にも、鵠の故事に類するものだったが——それを語った当の慧音が、不審げに鼻の上に皺を寄せ、眉をしかめる。

「鵠は後の世に雷獣としても語られるが、それは正体不明の妖怪・鵠という妖怪と外見の似た雷獣という別個の妖怪が混同・習合された故に起きたものだ。本来、平家物語等に記された鵠に、雷鳴を呼ぶ力は無い。八雲の式の九尾などは積極的にこれと同じことを繰り返し、さまざまな宗派に絡む力を全て自分のものとしているようだが」

守矢の神様が、風の神であると同時に戦の神で、蛇だったたり、祟り神であると同時に蛙だったたりするのと同じことだ。多面性を備えることで、多くの畏れ、多くの信仰を得て、より大きな力を得ることができる。

「然るに、彼女は己を正体不明の妖怪として定義し成り立たせて

いる。で、あれば——この嵐はいかにも不自然に過ぎる。この風雨や黒雲は明らかに彼女の力として機能しているにも関わらず、彼女は雷獣として力を振るおうとする様子がない」

つまり。

「この嵐を起こしている相手は、他に居るという事だ」

そこまで言われれば、鈴仙もすぐに彼女の意図を察する事ができた。脱ぎ捨てたジャケットから拳銃を抜く。

「そういうことね。……いいよ、任せて」

「頼みます、鈴仙さん」

深く頭を下げる妖夢に、鈴仙は軽く頷いた。銃の残弾を確認してリロード。口元を軽く緩め、すつと手を挙げる。一瞬呆けた様子の妖夢だったが、すぐに意図を察してくれたらしい。

ばん、と掌を叩き合わせ、二人は領いて路地裏を飛び出した。



暴風雨の中、鈴仙は宙へ高く飛び上がり、狂気の眼を見開いた。三百六十度を睥睨し、視界に収まる全てを捉える。

存在さえ示唆されれば、鈴仙の眼はいかなる隠蔽すら看破する。

「そこだ！」

赤い魔眼が光を放ち、構えた銃口が十字の砲火を閃かせた。

「きゃああ!!」

夜空の黒雲の中、高い声が響いた。降り続いていた雨、ごうごうとうねる風が不意に止まる。

大きな茄色の傘——そこにいくつも穴をあけて。付喪神、多々

良小傘が虚空から突如出現し、鈴仙に向けて落ちてくる。地面に突っ伏して『むぎゅっ』と声を上げる彼女の懷から、羽根の生えた蛇がするりと這い出してどこかに消えていった。

「なんで!? ちゃんと隠れてたのに——」

「あいにくね。かくれんぼの鬼は得意なの」

驚愕の声を上げるお化け傘に、ウイंक一つを挟んで銃口を向け、即座に引き金を引く。緋色の銃弾から辛うじて身をかわしながら、小傘は悲鳴を上げた。

「ぬ、ぬえ、話が違ふよッ!」

「——おっと。2対2なんだから、卑怯なんて言わせないよ」

「っ——」

助けを求め逃げ出そうとする小傘の前に回り込み、鈴仙。

突き付けられた銃口に、小傘は身を硬くした。空には変わらず

黒雲が渦巻いているが、雨はびたりと止んでいた。

「永遠亭の鈴仙・優曇華院・イナバが、あなたに命名決闘を申し込むわ。条件は零死<sup>死傷無し</sup>二符<sup>二ボム</sup>。私が勝つたらこの勝負への手出しを止めて貰う。……どう?」

「……………」

小傘の能力では、命名決闘中に風雨を起こしてぬえの支援を行うほどの器用な真似はできない。時間稼ぎが目的なのは明らかだが、鈴仙が提示した条件に、小傘は不満を覗かせながらも受諾せざるを得なかった。

正体を暴かれた時点で小傘のアドバンテージは大きく削がれて

いる。元々の実力も考えて、同条件で勝負できるならこの命名決闘、受けた方がまだ勝機があるのだ。

「ええいつ、兎なんか黙ってやられるもんか! お化け傘の底力、見せてやるわよっ!」

「オーケー、じゃあ行くわよ」

自棄になって叫ぶお化け傘に、鈴仙はウイंकを一つ。

——狂符「幻視調律」

——傘符「バラソルスターシンフォニー」

双方合意完了。互いに用意したデッキの一枚目、スペルの宣言は同時となった。



閃く刃、散る火花。斬り込んだ楼観剣の切っ先を羽根で払い、ぬえは口元に牙を覗かせて鬱陶しげに咆哮を上げる。

「諦めの悪い奴だな」

「性分ですから」

「……ふん。何度やっても無駄だ。猪武者に私は斬れないよ。怯えて、泣き喚いて、自分の無力を悔いて死ね！」

不機嫌そうに唸る正体不明の獣。上空では鈴仙と小傘の弾幕戦が幕を開けていた。派手なスペルの応酬が繰り広げる閃光と轟音を耳障りだとばかりに吼え、ぬえは前脚を地面に叩きつける。

視界を埋めるほどの呪詛の矢——赤黒い怨念の鏃が、地を穿ち屋根を砕き、妖夢へと迫る。

気配を、風音を、鉄の匂いを感じて剣を振るい、鏃を打ち払いながら、妖夢は一時も足を緩めずに走り続ける。

突如路地裏から現れ首を跳ねんと振り下ろされるぬえの爪鎌を半身になって避け、返す刃を黒い獣へと押し込んだ。

しかし返ってくるのはやはり、これまでと同じむなし空振りの手ごたえ。

「この土壇場で、都合よく心眼開眼——なんて訳に行かないか」自嘲と共に吐息する。そう言えば昔に幽々子に急かされた事があったなと思ひ出して、軽く笑みがこぼれた。

曰く、雨を斬るのに三十年。空気を斬るのに五十年。時間を斬るのには二百年。妖夢の求める師の背中には、その遙か先にある。妖怪は人を襲い、人は妖怪を退治する。幻想郷の成立以前から、連綿と繰り返される人と妖怪のあり方。

鬼と対峙し、妖夢はそれを学んだ。

半分だけでも人間であるならば、人として妖怪に相対し、その理不尽と恐怖、彼等の嘆き叫ぶあらぶりを見据え、真つ向相対せねばならない。

「……未熟なれど」

それが、迷いを断ち切り、妖怪を一振りで十四斬るといふ、白玉楼剣術指南役、魂魄の剣だ。

“刀がなきや何にも出来ないくせにな！”

ぬえの嘲りが耳の奥に反響する。

悔しいがその通りだ。楼観剣、白楼剣の二刀とともに、白玉楼を預かる役目も受け継いだが、妖夢は刀に振り回されてばかり。

師の境地はいまだ遠く、この刀がなんの意味を持ち、己がなんのために振るうのか。その答えの形すら掴めていない。

それは翻せば、己の腕が未熟なことの不安の裏返しだ。

正体不明の妖怪、封獣ぬえ。正体不明を力として纏う彼女は、不安をその力の源とする。不意を打たれることを警戒すれば、正体不明の種は隙について襲いかかり、怪力を恐れれば無双の剛力を、駿足を嫌えばその速度で襲いかかる姿を、見るものが勝手に

そこに見出してしまおう。

楼観、白楼、ぬえの前で二刀を見失ってしまったのも、妖夢自身がどこかで、自分が白玉楼の剣術指南たる証の二刀に相応しくないと思っていたからだ。

そんな迷いを抱えたままでは、この手の中の二刀でなにひとつ斬れることはないだろう。

「……そうか、私は」

ぬえと切り結ぶ中、妖夢はふと思ひ至る。

魂魄妖夢は。自分は。解らない事が。定まらない事が。

「答えを出せないでいるのが、怖いのか」

認めてしまえば、ずっとその事実は胸の底へ落ちていった。妖夢は己を器用だとは思ってはいない。難しいことは苦手だし、融通のきかない性格と思ひ込みの激しさを幽々子にも良くからかわれてばかりだ。それでも、自分にできるやり方の中で、最も性にあっているのが、迷いを振り捨て、愚直にまっすぐ突っ込んでいくことだ。

それこそが、妖夢の最たる短所なのだ。

諦めず、愚直に前に出る——そう言えば聞こえはいいが、それは解らぬものを許容せず、必要なものを無駄と切り捨て、性急に結論を急ぐことに他ならない。

斬れば、分かると、師の言葉を借りて結論を出そうとする。短絡的に答えを求めようとする。

だが。己すら見定めることもできぬのに、そんな未熟者が振るう剣で、どうすれば鶴を斬れるというのか。

（そうだ。確かに、私には——正体不明 鶴は、斬れない）

妖夢は空に呪詛を巻き散らすぬえの姿を見上げる。里を巻き込み荒ぶる、恐怖と凶兆の獣の、鳴き声のような咆哮を聞く。かの大妖怪は、己の謎を解けぬ者には決して姿を晒さなかった。

あるいは、かつて二矢をもつて鶴の姿を見極めた、かの源三位頼政であれば、彼女に抗することもできるのかもしれないが——

「……ん？」

空を埋め尽くす呪詛の鎌を見上げ、ふと、妖夢の頭に閃くものがあつた。

さても我 悪心外道の変化となつて

仏法王法の障りとならんと 王城近く遍満して

東三條の林頭に暫く飛行し

丑三つばかりの夜な夜なに 御殿の上に飛び下れば

平安京の夜を恐怖に陥れた怪物鶴は、源三位頼政の放った弓に射抜かれてその姿を晒し、討たれたという。

「だと、するなら！」

妖夢は叫び、広場に躍り出ていた。無防備に身を晒す白玉楼の庭師へ、狙い定めたかのように呪詛の矢が降り注ぐ。勝利を確信し、鶴の鳴き声が高らかに空に響き渡る。

千を超え万に迫る、悪鬼の鎌へ身を晒し——妖夢が繰り出した白楼の刃が、虚空に残像を残し、輝く鏡を描き出した。

——反射下界斬。

魔を暴く鏡は寸分違わず源三位頼政の弓を受け止め、そのままぬえへと弾き返す。

夫先にかかれば変身失せて 落々磊々と地に倒れ  
忽ちに滅やし事 思えば頼政が夫先よりは 君の天罰と

妖夢を射抜かんとしたその軌道を正確になぞって弾き返された矢は正確に、鏃となって鵠の身体を穿った。

「つが!？」

これまでいかな弾幕も刃も捕えられなかった彼女の身体を鏝う正体不明が、大きく揺らぐ。泰然と空を駆けていた黒い獣は、激しく身悶えし呻きを上げる。

それは、鵠の断末魔。

弾き返された鏃の一本は、見事ぬえの纏う正体不明の澱みを貫き――彼女の肩を深く穿っていた。

長い戦いの果て、ついに正体不明の化物という神格を剥がされ、その身を纏う黒靄がモザイクのように乱れ、剥がれ、黒衣の少女の姿が露わになる。

「――おまえ、ッ」

ざらざらと。怒りに満ちた目で妖夢を見降ろし、ぬえは肩に食い込んだ矢を引き抜いた。口元に鋭い牙を覗かせ、唸る。それを見据え、妖夢は断然と言い放った。

「これであなたの謎を斬った。次はあなたの名を、斬る!」

「――上等だッ!」

ぬえは吹き散らされた闇霞を再び纏う。しかし名前を斬られた鵠を覆い尽くすには至らず、夜啼鳥の姿を半分覆い隠すばかり。纏う闇の向こうには、短い槍を手にした少女の獐犢な笑顔が覗いている。

ひゅんと振るわれた短槍が、倍ほどの長さに伸びた。ぬえは鋭利な切っ先を振るって飛び来る弾幕を迎撃、背中の肢を広げてそのまま妖夢へ襲いかかる。

一本が妖夢の楼観剣にも等しい長さの、甲殻類の爪の鎌。屋根瓦を断ち割り、避けた土壁ごと突き崩す威力だ。さらに弧を描いて絡み付く毒蛇が、妖夢の太腿に噛み付く。爪鎌と蛇の頭、六本の翼を交え、嵐のような連撃が襲う。

ぬえの槍さばきは凄まじいものだった。そもそも彼女は武士の源流、源平の争乱を直接知る古き妖怪なのだ。その穂先に、刃筋を受けながら、妖夢はぬえの積み上げた修練と、それを鍛えた彼女の持つ絆を確かに感じ取る。

六手三尾の甲殻の触手と蛇の牙を、二刀で受け、捌き、力の入らず柄を取り落としそうになる腕を半霊で包んで支えて、柄頭で防御を弾き、身体を返して蹴りを叩き込み、触腕を白楼剣で絡め受け止め、切り上げる。

「つあああああああ!」

喉元を狙う穂先に、妖夢は正眼に構えた楼観の切っ先を絡め、撃ち落とした。

……半分は賭けであつた。  
けれど、妖夢は半ば、この結末を確信してもいた。

慧音は言っていた。正体不明を操る能力は、歴史と極めて相性が悪いと。

では、何故正体不明のはずの彼女が、都を騒がした大妖怪としてその名を歴史に残しているのだろうか？

その正体をだれも見極められないのなら。彼女が徹頭徹尾、正体不明を貫いたのなら、ただ妖怪という現象だけが遺され、鶴という妖怪は存在すら認識されず、歴史にも記録にも残らなかったはずなのだ。

そうならなかったのは、彼女の正体を暴く者がいたからだ。怪異の正体がなんであったかを、明らかにする者がいたからだ。

正体不明。即ちそれは、人の真実を探る心と対になるものだ。謎とはそれを理解せんとする者がいるから謎として成立する。相手のいない場所で、謎も秘密も有り得ないのだ。

「正体不明は、暴かれるからこそ正体不明でいられるんだ！」

そもそも、ぬえが本当に自分の正体を隠していたのなら、己の出自に関わる憎き弓矢を己の最後の切り札とする理由がない。あるいは——命名決闘とは、そういうものではなかったか。

妖夢はぬえの槍の穂先に楼観剣の切っ先を合わせて弾き挙げ、刹那の間に駆け込み、己の半霊を足場に反転して切り返す。

一步の踏み込みで、前後から同時に楼観剣が斬撃を刻んだ。

二つの刃を避け切れず、ぬえの胸が深く薙かれる。が、

「甘いねッ！」

ぬえは身体を上下に断ち割られてなお平然と豪語し、妖夢を狙

う。遠心力を乗せて叩きつけられた穂先が楼観剣の柄を貫いた。同時、分割されたぬえの上半身と下半身で、共に異常が起きた。どろりとした闇のようなものを纏わせた切断面から、まるで泥が溢れるように——上半身からは下半身が、下半身からは上半身が生えたのだ。

二人になったぬえは、正反対の手に握った槍と、三対の羽根を妖夢へと繰り出す。

（惑わされるな、これは——）

さつきも見た幻術だ。鏡像によるスペル、正体不明「紫鏡」。左右のうちどちらかが偽物——

否。

「どっちも偽物だ！」

振り返らぬまま、妖夢は後ろ手に抜いた白楼剣で背後を斬りつける。迷いを断つ剣が正体不明の種を狙いたがわずに貫くと、投擲された槍に姿を変じていたぬえが、忌々しげに舌打ちした。

鶴は人を喰らう妖怪ではない。

都の夜闇を脅かし、恐怖を振りまく妖怪。逆に言えば、彼女はそれだけのことしかないのだ。

混乱し、困惑し、戸惑えば戸惑うほど、ぬえの正体は闇に霞む。梢のざわめき鳥の鳴き声、風の唸りまでもが疑心暗鬼を生み、正体不明の怪物の力となる。

だからこそ鶴はことさらに怯えを煽り、恐怖を演出する。

鶴にとつて力の根源とは、自分が何者かを知らせない正体不明の力であり、それを暴かれたが最後、力を失ってしまう。

（相手を騙そうとする力をもった妖怪は、相手の裏をかこうとする。思考の裏、逆、それを狙おうとする）

それは妖怪の性質のようなものだ。ぬえはどこまでいつても、鬼のように馬鹿正直に殴り合う事を由としない。

本来は絡め手の中に正道も混ぜ、こちらが来るかどうかどちらが来るか、疑心暗鬼を招いてその恐怖を糧に力を蓄えるのだ。だが、鵄はその名を斬られ、大きくその力を減じていた。

斬るということは、突き詰めればひとつ。断ずるという言葉の示す通り、斬らんとする意志が全てだ。己をもつて他を退け、迷いを断ち切り、前へと進む。

己をひと振りの太刀にせんと、息吹を吸い込み、楼観剣を正眼に構えた。脇を締め、余計な力を解き、柄尻に小指を絡める。

「——ッ、い」

踏み込みとともに、全身に漲らせた剣気を四尺七寸の太刀へと穏やかに注ぎ込む。楼観の太刀は二回りも存在感を増し、大上段に掲げられて輝いた。

### ——断迷剣「迷津慈航斬」、

「イイヤアアアアア——————————ッッ！」

かち上げた太刀を、そのまま躊躇なく、大鈍のように斬り下ろす、裂帛の気合いと共に、四尺七寸の刃が振り抜かれる。

雨を、風を断ち割る楼観の剣は、正体不明をま二つに断ち切っていた。

——そしてなお、止まらない。

振り下ろした切っ先を跳ねあげ、旋回と共に横薙ぎへ一閃。ぎゅおと風を裂いて逆袈裟、そこからさらに渾身の振り下ろし。四尺七寸の楼観剣が、翻り、踊り、跳ね、なお速く閃く。

瞬きを七十二に分割した刹那よりもなお早く。間を置かぬ刃の嵐が、鵄を——京都の夜に君臨する正体不明の怪物を切り刻む。剣家精妙の処、識を要せば、電光影裏春風を斬る。

### ——奥義「西行春風斬」

冥界は白玉楼、二百由旬の庭。

そこを駆ける己を、一つの太刀として。

なお、鮮やかに閃く西行妖の華を散らす風が、ぬえの纏うその名、正体不明の鵄を、九つに裂いた。



さて、人里を突如襲った黒雲の嵐と不気味な鳴き声の怪異から、一夜が明けて。

「あ痛あ！」

「うぎゅう……」

縄でぐるぐる巻きにされた拳句、敵めしい顔の雲入道にごつんと巨大な拳骨を振り落とされ——「ちん」というよりもずどんとかどかんという擬音が相応しく思えたが——小傘は目を回して倒れ、

ぬえは背中羽根で頭を押さえて叫ぶ。

騒動の酒販たちを前に、水兵服の舟幽霊、村紗水蜜は呆れ顔で深く吐息した。

「勤行の途中で居なくなった見えなくなったと思ったらこんな悪さして……少しは聖の迷惑も考えなよ」

「なんだよもー、ムラサまで私が悪いって言うの？」

「はあ……やったことの反省くらいはしろって言うてるの。あんなのやった事は悪戯じゃ済まされないことなんだからね。小傘ちゃんまで巻き込んで」

真面目な顔で村紗に詰め寄られ、ぬえもようやく口を噤む。

ひたすらに謝り通しの白蓮と一輪に、里の者たちはと言えば案外暢気なものだ。里の商店街に出た被害は決して過小とは言えぬものであったが、慧音が心配していたほどには深刻な様子は無い。里に出た被害の大半を補填するため、匿名で多額の寄付があったということも功を奏しているのだろう。

「まあ、お前さんはちときつく灸を据えてもらった方がためになるじやろうなあ」

「うー……」

頭を下げ通しの白蓮のほうを見やり、化け狸が釘を刺す。ぬえもある程度は事態の深刻さを理解しているらしく、一応は神妙にしている。

人里で禁止されている戦闘をした事については何らかの咎めはあるだろうし、他勢力の手前、妖怪の賢者もただ看過することは無いだろう。

しかし、里の異変を察知し嬉々として妖怪退治に訪れた仙人達や、山の神様の巫女達が到着する前に事態がおさめられ、彼女達が肩透かしを食らった結果となったのは僥倖でもあった。

案外これもまた、どこかのスキマ妖怪が暗躍した結果かもしれないが――

「ぬえさん」

「なんだよ」

鈴仙に肩を借りて歩み出た妖夢に、ぬえは不機嫌そうに唸る。

慧音の能力で消えていた負傷の歴史は夜明けとともに元に戻り、包帯に添え木だらけの酷い有様だ。

「良ければまた、手合わせをお願いします」

「ふんだ。やなこと」

露骨に嫌な顔をして、ふいと顔を反らす正体不明の妖怪。

「正体不明がウリの妖怪が、真つ向斬られるなんて恥、そうそう晒せるもんか」

そう言いながらも、ぬえの背中では、羽根が落ち着かない様子で動いている。

昨夜の豪雨が嘘のように空は青く、高い。

痛む手足は十全の体調とは程遠くあったけれど、妖夢は晴れやかな空を見上げ、初夏の息吹を胸に満たして微笑んだ。

## 【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。

折葉坂三番地の銅おりはと申します。

このたびはお手に取っていただきありがとうございます。

この本、『妖夢討夜鳥事』は、白玉楼の庭師が正体不明の怪物、鶴に挑みその正体を討つに至る顛末を描いたりする、当サークル二十六冊目のS本となります。

ほんのりと前作「魂魄妖夢鬼退治」の続編である事を匂わせる記述がありますが、時系列的には数カ月後となります。当サークルの既刊は基本的に無料配布しておりますので、もしご興味をお持ちいただければ奥付のアドレスへどうぞ。

神霊廟のプレイ中、キョンシーにお化け傘にと怪談になりそうな相手目白押し四面ボスのラインナップを見つ、そもそも妖夢は一体どの辺が怖がりなんだろう、と思ったのが今回のお話の発端でした。

いつものごとく捏造満載ではありますが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。

今回も発刊にあたり、いつもながら白身氏、Riz a氏には様々な形でお世話になりました。この場を借りてお礼をさせていただきます。

———それでは。

また次の機会にお会いできることを願って。

## 【参考文献】

## 【奥付】

ようむよりをうつつこと  
「妖夢討夜鳥事」

平成25年5月26日 第10回博麗神社例大祭

平成25年6月9日 東方求名録3（第二刷）

発行 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

著者 銅 おりは

※本作は「上海アリス幻楽団」様の  
「東方 project」の二次創作です。



執筆 2006 年度入部 K.E 能「鶴」全文現代語訳  
能「鶴」全文現代語訳  
[http://style.jp/ritsnob/readings/yaku\\_mue.html](http://style.jp/ritsnob/readings/yaku_mue.html)

魂魄妖夢鵠退治 庭師討夜鳥事

平成廿五年

五月廿六日 初版



発行 折葉坂三番地

<http://oruhazaka.dojin.com/info/blog>